EXPO'70基金　2019年度 助成事業事例発表会

（2020年10月2日／大阪工業大学梅田キャンパス 常翔ホール）

関西・大阪21世紀協会は、日本万国博覧会記念基金*による助成事業を広く知っていただくため、2018年より、国内外の助成先を一堂に集めた助成金贈呈式と事例発表会を実施しています。しかし、昨年はコロナ禍の影響により贈呈式を中止。2021年度の助成事業募集説明会と併せ、2019年度の助成先３団体の事例発表会を開催しました。当日は、日本各地から当助成事業への申請を検討している事業者の方々など80名が来場し、3団体の発表にも興味深く耳を傾けました。ここでは、その団体の活動についてご紹介します。

＊日本万国博覧会記念基金（EXPO'70 基金）
1970年に大阪で開催された日本万国博覧会の収益金の一部を元に創設。当協会は、2014年に独立行政法人日本万国博覧会記念機構から基金を継承・管理し、その運用益を国際相互理解の促進に資する活動や文化的活動に助成しています。

「平和と美術と音楽と」
Peace Art Project in ひろしま実行委員会

アートを通して平和を発信
夢や希望を感じてもらうのが広島の役割

中川圭子氏（事例発表会にて）

広島から世界に向けて平和を願い、アーティストが連携して夢や希望、癒やし、祈りの心を発信する「平和と美術と音楽と」（Peace Art Project in ひろしま実行委員会）。2017年に第１回が開催されて以来、原発事故で放射能被害を受けた福島県やウクライナと、原爆が投下された広島県、長崎県で「アート」を通じた交流を深めてきました。

2018年４月には、広島の演奏家が「被爆ヴァイオリン」を携えてフランス（パリ）でのサロン・コンサートや、ウクライナ（キエフ・スラブチチ）での「チェルノブイリ追悼イベント・コンサート」に参加。「ヒロシマ」「ナガサキ」からの訪問が現地で大きな反響を呼び、感動的な交流が地元メディアで報道されました。また、8月には平和記念公園（広島市）でのコンサートの開催や長崎平和音楽祭への参加など、23か国・5700人が参加しました。

2019年には、被爆建物の旧日本銀行広島支店で被爆ヴァイオリンと被爆ピアノのコンサートや、子どもたちによる被爆樹木で作ったパンフルートの演奏、キッズゲルニカ（ピカソの『ゲルニカ』と同サイズのカンバスに描く平和の絵）など、さまざまなアートパフォーマンスが披露されました。また、サブイベントとして、アメリカ（フェニックス）でインディアンのホピ族の人たちと交流し、現地で演奏が行われました。ホピ族の住む地域からは、1945年にニューメキシコ州で行われた人類最初の核実験に使用されたウランが採掘され、それに従事したホピ族の多くが被曝（ひばく）しました。8月6日の原爆慰霊祭にホピ族の人たちが広島に来て祈りを捧げてくれたこともあり、以来、核の犠牲者の遺族を持つ者同士として交流し、平和への想いを共有しています。EXPO'70基金の助成金は、これらのイベント運営に役立てられました。

被爆75周年を迎えた2020年は、広島市の助成金（広島市文化芸術の灯を消さないプロジェクト）を得て、インターネットで実施。広島とニューヨークを拠点に、ヨーロッパ各国やパレスチナ、ルワンダ、ニュージーランドなど、世界14か国（17都市）から送られた44本の動画を、８月６日から翌７日にかけて24時間YouTubeで配信しました。

事例発表会では、実行委員会代表の中川圭子氏（NPO法人Heart of Peace ひろしま代表理事）が、「草木も生えないといわれた広島が、2020年、ついに被爆後75年目を迎えました。今、広島には緑が溢れ、まちには子ども達の歓声が響いています。この復興は、日々懸命にまちを育ててくださいました先輩方の努力と、世界中の人々が広島に想いを寄せ、祈りの気持ちを向けてくださったおかげ。平和とは、一人ひとりがの心の中に平和を感じることだと思います」と挨拶。続いて、ヴァイオリニストの佐久間聡一氏（広島交響楽団第一コンサートマスター）による被爆ヴァイオリンの演奏が披露されました。

このヴァイオリンは、戦前、広島女学院のロシア人音楽教師だったセルゲイ・パルチコフ氏の所有物で、爆心地から2.5 kmの地で被爆し、2014年に修復されたもの。後年、同氏の祖父がウクライナ・キエフの出身で、ヴァイオリンは当地で作られたものだと分かりました。佐久間氏は、「これを弾くと、75年前に大切にこの楽器を持っていた方と、その方の演奏を聴いて感動した方がおられたことを思う。その独特の音色を味わって聴いていただきたい」と述べ、『タイスの瞑想曲』と『ラルゴ』が奏でられると、会場が優しく温かな雰囲気に包まれました。

中川氏の両親は入市被爆者（原爆投下直後に爆心地近くに入り、残留放射線の影響を受けた人）でしたが、事業をしていたことから口外できませんでした。当時は被爆者に対する強い差別や偏見があったからです。そのため中川さんも結婚するまで被爆２世であることは知らされず、出産後しばらくして、夫婦お互いが被爆２世だと分かったのでした。

そんな中川氏が子どもの頃、毎年8月6日になると叔母に連れられて広島平和記念式典に行くのが恒例でした。しかし、そこで核廃絶や戦争反対を訴える人たちのシュプレヒコールやデモ行進を目にするのが嫌で、子ども心に「どうしてみんなハチロク（原爆の日）を静かに迎えることができないのだろう」と思っていたそうです。その日は多くの人の命日で、中川氏の祖父も被爆して行方がわからないままだったからです。

その思いは大人になっても変わりませんでした。また、8月6日が近づくと世界各国から人が来て、平和を訴えるさまざまなイベントが行われるのですが、そうした「お祭り」のような状態に広島市民が慣れてしまい、自分たちのまちのことなのに無関心な人が多いことにも違和感を持つようになりました。そこで、そういう「運動」とは違う形で、広島から平和を発信できないかと思っていたときに出会ったのが「音楽」でした。

被爆ヴァイオリンで演奏する佐久間聡一氏（事例発表会にて）

中川氏は、2016年に東日本大震災の復興支援を行うNPO法人「Heart of Peace ひろしま」を設立しました。きっかけは、2011年11月に開催された朝崎郁恵さんの東北チャリティーコンサート（世界平和記念聖堂／広島市）で、ピアニストの高橋全氏が東日本大震災の犠牲者への慰霊を込めて弾いた曲『祈り』を聴き、衝撃を受けたことでした。東北に向けたわずか3分間ほどの黙祷が、音楽が加わることで劇的な感動の空気に包まれたのです。「言葉で訴えるより、音楽の方がみんなの心がつながる」と確信した瞬間でした。後年、広島のある演奏家から、「海外で演奏したとき、主催者から〝何も話す必要はない。ただヒロシマから来てくれたというだけで、聴衆は感動してくれる〟といわれた」という話を聞き、その通りだと思ったそうです。中川氏は「広島が原爆投下から復興したように、福島もキプロスもチェルノブイリも必ず復興できる。そういう夢や希望を感じてもらうのが広島の役割だと思う。そのために文化で日本人のスピリットを世界に発信するときが来ている」と、力を込めて語りました。

▼「平和と美術と音楽と 2019」実施のようす

広島市立千田小学校児童によるパンフルート演奏
（旧日本銀行広島支店／2019年8月4日～6日）

キッズゲルニカの展示（同左／2019年8月2日～6日）

ホピ族保留地での交流会
（アメリカ・フェニックス／2020年2月25日）